

令和7年度 第3回記念館講座「川端龍子と青龍社の女性画家たち」

大田区立龍子記念館 副館長（主任学芸員） 木村拓也

■日本画家・川端龍子について

- 1885 (M18) 年 6月6日、和歌山市に生まれる（本名：昇太郎）
- 1913 (T2) 年 渡米、帰国後に日本画家に転向
- 1915 (T4) 年 30歳の時、再興第2回日本美術院展に入選。その後、院展の花形として活躍
- 1929 (S4) 年 院展脱退した翌年、自らの美術団体青龍社を設立
- 1945 (S20) 年 自宅が戦災に遭ったにも関わらず、終戦2か月後に第17回青龍展を開催
- 1963 (S38) 年 文化勲章受章（1959年）と喜寿を記念し、龍子記念館を設立
- 1966 (S41) 年 4月10日 80歳で逝去。青龍社は龍子の死とともに解散

1 美術団体・青龍社について

- 1929 (S4) 年 6月、前年に再興日本美術院を脱退した川端龍子が創立
9月、14名20点の第1回青龍展を東京府美術館で開催し好評を博す
- 1933 (S8) 年 春の青龍展を設置。第5回展から公募制を導入
- 1940 (S15) 年 会場を東京府美術館から日本橋三越に変更
- 1945 (S20) 年 終戦の年も他の美術団体に先駆け青龍展を開催
- 1966 (S41) 年 龍子の死とともに解散。解散時、社人22人、社友17人、社子46人在籍

・青龍社が目指した「会場藝術」

床の間を飾る日本画から、展覧会で観衆のために展示される日本画へと革新

「大衆と藝術の接触到展覧会の施設を礼讃する」（「会場藝術の主張」『第3回青龍展目録』1931年）

- ・青龍社は「近代日本画壇における第三の道の開拓」（河北倫明『読売新聞』1966年4月11日）
文展（文部省美術展覧会）のような官展にも、在野の日本美術院にも属さない第三の道の開拓

2 青龍社の不屈の女性画家・小島鼎子（1898-1964）

東京・神田美土代町に生まれる。

- 1915 (T4) 年 17歳の時に日本画家・池上秀畝のもとで学び始める。
- 1922 (T11) 年 洋画家・遠藤辰之助と結婚、その後は吉祥寺に暮らした。この頃、龍子に師事。
- 1929 (S4) 年 青龍社創立メンバーに参加。1963年の第35回青龍展まで、連続出品を果たした。

鼎子のエピソード

- ・池上秀畝のもとで学んだ後、1922年に龍子に師事。「子供があり、家庭の事に追われ何を苦しんで絵など」と周囲から心無い言葉が投げかけられた。
- ・一方、若き日の鼎子に龍子は「ゴムの風船 八分でくーる たまには吹き割れ 絵風船」と、いつか吹き割れはしないかと憂慮もしている。その中で鼎子は研鑽を積み、「厚味を持った、奥行きのある表現になるまで可成りの深刻な苦しみをした」と龍子はその努力を認めるところとなる。
- ・1929年の第一回青龍展に出品した《山百合》は、母への思いを込めて描き上げた一作。
青龍社で鼎子が示したものは、山百合のように凜として力強い不屈の精神であったといえる。

1931年3月に次女が誕生した後、青龍社の機関誌に「日曜の午後」という詩を寄稿している。

「美しくしき日ざし眺めて今日も過ぐ 梅白く咲く日曜の午後

目覚むればなす事もなし指の爪 今日眺めて産褥に吾れ

春の日もむなしくたたむあだ枕 一人かひなく夢路にあるも

くろぐろと障子に影すねこ柳 ゆらぐを見れば風のあるらし」

→産後の絵の描けない時期の憂鬱さを表す言葉の裏に、描くことへの鼎子の情熱が垣間見られる。

3 青龍社のモダンガール 谷口富美枝（仙花）（1910-2001）

東京・渋谷に生まれる。上村松園に憧れ画家を志す。

1928（S3）年 女子美術学校に入学し、1930（S5）年から青龍社の展覧会に出品する。

1935（S10）年 《粧ふ人々》でY氏賞受賞。1938（S13）年に青龍社脱退、雅号を仙花とし個展開催。

1944（S19）年 船田玉樹と結婚、夫の郷里の呉市に疎開。

1955（S30）年 再婚し渡米、2001年にロサンゼルスで逝去する。

- ・大学在学中に青龍社でデビューし、働く女性や流行のファッションを描いて注目される画家に。「この頃の若いモダンな女達の生態は男の人達には難しいのではないかしら」と、現代を生きる女性でなくては描けないモチーフの日本画を描いた。
- ・青龍社脱退後、前衛画家の船田玉樹と結婚するも画業も家庭もうまくいかず、新天地を求め渡米。アメリカでも不遇の時代が続いた。晩年、私小説内で「いつの間にか師がこの世の唯一の男の姿に変わってしまっていた」と画家と女性との狭間で苦しんだ過去を吐露している。

4 戦後の青龍社と高頭信子（1929- ）

大田区の池上に生まれ、画歴70年を超えた現在も大田区を拠点に活動する。

1948（S23）年 女子美術大学在学時に川端龍子に師事

1953（S28）年 第25回青龍展で初入選。1958年の第30回記念青龍展で社友となる。

1969（S44）年 青龍社の社人たちが創設した東方美術協会に参加、現在、会長を務める。

- ・戦後の日本画壇の風雲児とも呼ばれた横山操らとともに美術談議に明け暮れたりもした。
- ・「具象から抽象を見させよ」「他の者にはないものがある」という龍子の助言を胸に制作を続ける。

青龍社の最後

「青龍展なる固有名詞は龍子が墓の中へ持って往くといふこととなるのである」（『第35回青龍展出品目録』1963年）という宣言に基づき、龍子の没年、1966年5月に青龍社は解散する。

→累計の出品者数は250名、出品作品数は2,000点を超える

〇まとめ

青龍社の歴史は37年で幕を下ろしたが、日本の近代美術に確かな様式を根付かせ、新しい日本画を生み出そうとする画家たちが多くいた。女性画家たちを始め多様な個性溢れる画家に注目できる。

■龍子記念館ほか展示情報

龍子記念館 名作展「源流へのまなざし モティーフで見る川端龍子」 ～3月8日（日）

次回 名作展「絢爛と健剛 川端龍子の作品における装飾性」

併催：町立湯河原美術館収蔵 平松礼二作品展 3月28日（土）～

馬込アートギャラリー 「地域の美術を掘り起こす/読み替える」 ～5月10日（日）